

新島襄という 清水安三の夢

しまだのりゆき
嶋田 律之 (桜美林大学教員)

1. 桜美林学園の歌碑・
「大学の設立」そは少き日
に新島襄に享けし夢かも^{わか}

1975年5月2日、当時同志社総長であった住谷悦治先生から、松下幸之助氏、井深八重氏、中村遙氏と共に、桜美林学園（東京都町田市）創立者、清水安三（1891-1988）に名誉学位（神学博士）が授与された。その際、住谷総長は「桜美林学園のキャンパスの真中には、『夢、大学の設立こそは少き日に新島襄に享けし夢かも』と刻んだ碑が立っている。新島精神はついに東京にまで進出するに至った」と言って、うれし涙に咽びつつ「自分の事を紹介してくれた」と清水は述懐している。

清水安三が詠ったこの句は1966年12月27日に、かねてより文部省に4年制大学設立申請をしていた中で、その認可の内示が下った日に詠んだ歌と言われている。清水が73歳であった時である。この内示を受けて、既に設立されていた短大、中学、高校の全職員、そして、全学生が喜び祝ったのであった。その際の清水の喜びを率直に表している文章が残っている。



新島歌碑

「27日の夜、私は今夜我輩は狂うのではないかと思われてならなかった。とうとうやり遂げた。五十年間執拗に持ち続けた夢だ。とうとう成し遂げ得た。しつこく寝ても覚めても夢み続けると夢というものは、必ずリアライズされるものである。昔、新島先生は、明治二十二年大学設立の趣意書を懐にして東上、東奔西走の余り、遂に病を得て大磯湾頭の逆旅ムカデ屋で翌年一月忽焉として召天遊ばされた。

私は新島先生の靴のひもを解くにも足らぬ器ではあるが、今日自らの鼻の穴からイキが入りしている間に、桜美林を大学とはなし得た。なんとという幸運であろう。」

2. 清水安三のキリスト教との出会い

清水安三は1891年滋賀県の高島町の大きな「半農半商の家」に生まれた。しかし、実家の没落とともに、常に困難な人生を歩んできた。膳所中学に入学したものの、貧しい家庭環境などによって学業に集中できず、清水自身の言葉によれば、いつもクラスの中の最後から数えた方が早い順位だったという。しかし、そのような清水に最初の転機が訪れたのがウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）との出会いであった。ヴォーリズは今でこそ、同志社の数々の建物をはじめ多くの名建築をのこしている建築家として知られ、近江八幡の町に一大教育、社会福祉施設を建設し、また第2次世界大戦直後に天皇とマッカーサーとの仲介役として通訳を請け負っていたこともよく知られている。しかし、清水安三がヴォーリズに出会ったこの頃は、弱冠24歳の八幡商業高校に雇われた英語教師に過ぎなかったのである。

清水は半ば強引ともいえるヴォーリズの課外授業・英語によるバイブルクラスに誘われ、そこでキリスト教に初めて出会う事になる。清水はこのバイブルクラスに欠かさず出席し、その間次第に教会にも通うようになった。そうして、1908年9月「近江の大津教会」において洗礼を受けクリスチャンとなる。

その当時、同志社の一つの基盤であった日本組合教会の大津における集中伝道集會が行われ、清水安三の洗礼はその成果の一つであった。その当時の事を清水はこう述べる。

「このように求道生活をしているところへ、集中伝道が大津に行われて、牧野（虎次）、西尾（幸太郎）、木村（清松）の三牧師が予備的伝道をやられて後に、堀（貞一）、長田（時行）、原田（助）三牧師が地ならしの伝道を試みられ、その後へ宮川（経輝）、海老名（弾正）、小崎（弘道）の三牧師がくつわを並べて講壇に立って、連日の講演会が行われたものであるから、さすがの僕もついに、洗礼を受けてクリスチャンとなったのである。」

清水がここで名前をあげている人々は当時の同志社出身の牧師のオールスターと言える人々である。そして、その中でも、決定的に清水安三を導いた説教をしたと言われるのが、後の同志社日代総長

となる牧野虎次先生であった。牧野先生はイェール大学の神学科を卒業し、牧師となり、同志社に帰って来た人であるが、当時、清水安三が洗礼を受けた当日の礼拝説教者であった。清水自身が述べているように、この牧野先生の次のような礼拝説教が「最も大きな影響を与えた」のである。「新島先生は、よくこうおっしゃられた。すなわち神は同志社のキャンパスにころがっている石ころさえも、なおよく新島襄とはなしうるのである」と。これは、聖書のルカによる福音書3章8節に書かれてある洗礼者ヨハネが人々に悔い改めを求めた言葉（「悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起すな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。」「応用」した説教だが、この説教こそが清水を同志社神学部へ進学させ、また、牧師へと至らしめたと言っている。

「そうだ！おれはたしかに石ころなのだ。けれども、神もし用いたもうものならば、おれごとき者でも新島襄になりうるのだ。こらあ、何たる福音だ。…この時から私の劣等感はあるかたも無く、消しとんでしまった。しかも「われは一個の石ころだ」という自覚が内面に展開して、ついに白石牧師の口ぐせだった「貧乏牧師」に自らを捧げようという決心をするようになったのである。」

3. 同志社時代

同志社大学への進学は、しかし、清水安三にとっては大変困難を伴う選択であった。一つにそれは、経済的な問題である。既に没落した貧しい農家となっていた清水の生家から、彼は経済的支援を期待できるべくも無かった。それ故、入学前から既に働きながら学業を得る事には彼にとっては前提であった。牛乳、新聞配達から人力車の人足、そして、家庭教師を続けた。しかし、2年生の夏休み以降はヴォーリズからの経済的支援を得ることができるようになったのである。ヴォーリズは「フィールドワーク」と称して、琵琶湖湖畔の町々でのキリスト教の集会を清水に任せ、金曜日の夜から日曜日の夜遅くまで各地の集会、教会で清水は神

学生としての働きを行った。

そうして、清水は大学を卒業して、伝道者として教会へと出る時期がやってくる。先取的に言えば、清水はいろいろな可能性の中から、中国伝道への道を選択していく事になる。もとより、当時、同志社神学部を卒業し牧師として社会に出る際に、大きく言って二つのコースが備えられていた。一つは国内の教会へ赴任すること。そうして、もう一つは専らアメリカの有名大学の神学部へ留学するという道である。清水はこのどちらにも結局は選択せず、中国への日本人初のキリスト教宣教師の道を選んだのであった。その理由は三つあったと言われる。一つは、同志社の新島襄の下で直接学んだ徳富蘇峰の影響である。更に、もう一つは日本の文化史に自らの犠牲を払って貢献した鑑真和尚との出会い。清水はたまたま訪れた奈良の唐招提寺で中国から来日した鑑真和尚の話聞いて、「発奮せしめられた」と述べている。しかし、最後の一つ、そして最大の理由と思われるのが、同志社生活最後の年の正月に「国際愛」という題のもとで京都の平安教会で催された祈祷会での、またしても牧野虎次先生の説教であった。それによると、牧野先生と同じくイェール大学出身の中

国への宣教師ホレス・ペトレキンが1899年の北清事変（義和団の乱）で殉教した事を記念するために、イェール大学では毎年献金を募り中国伝道を支えているという話であった。こうした「国際愛を説くには最も適していた」牧野先生の奨励を聞いて、清水は「もうどうしてもじっとしてられなかった」のであり、「そしてついに支那に行くことに心を決めたのである」と告白している。

4. 中国での崇貞工読女学校の設立

こうして中国への宣教師としていく決意が固まってから、後に清水安三自身の未来図を自身で語っているエピソードがある。それは、中国への出発の間際、宮川経輝牧師、そして高木貞衛（日本最古の広告会社「萬年社創業者」に連れられ大阪毎日新聞、大阪朝日新聞を訪問し、中国伝道についてのインタビューを受けた際の事である。その当時、大阪朝日新聞の社会部部长は長谷川如是閑であり、彼が清水の話聞き、清水が「ボクはシナへ行って20歳代には小学校を、30歳代には中学校を、40歳代には高等学校を、50歳代には大学を立てるつもりです」と「吹いたホラを、吹いたとおりに書いて

くれ」て、大阪朝日新聞に掲載されたと言っている。

1917年6月、清水安三は中国の奉天（瀋陽）に到着し、その後、1919年に北京へ移った。その間、同志社女学校出身で、デントン女史の影響でクリスチャンとなった横田美穂（1895〜1933）と出会い、結婚している。しかし、中国での暮らしは困難極まるもので、更に加えて、同年1919年に中国北部に大干ばつが起こった。それに対して世界中から支援活動が行われた。その中で、清水も北京周辺の主に農家の子供たちを救うための児童収容所を、献金を募る事によって建設し、799人も貧しい家庭の子供たちを収容したという。そして、干ばつが収まった1921年、この収容施設とその際得た資金を用いて、貧困家庭の女子のための読み書き、そして、裁縫の技術を身につけさせるための「崇貞工読女学校」を設立したのであった。創立当初60人足らずの学校であったが、その後徐々に発展していくことになる。そこで掲げられた建学の精神が「学而事人（がくじじん）」（学んで人に仕える）であり、これは現在の桜美林学園においても継承されている。

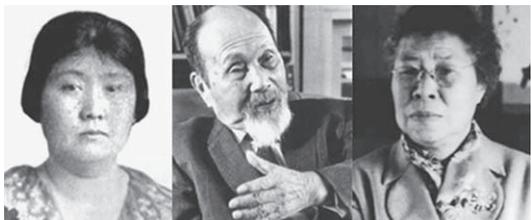
この「崇貞学園」に清水安三夫妻は心

血を注ぎ、これ以降第2次世界大戦で日本が敗戦し、中国政府にこの学校が没収されるまで、中国に留まる事になる。しかし、その間二度、清水は中国を離れている。一つは、1924年〜1926年まで、実業家大原孫三郎（現クラレの2代目社長）の援助により、アメリカ・オハイオ州にあり、同志社と同じキリスト教組合教会系の大学・オベリン大学への留学である。そして、もう一つは1928年〜1932年までの同志社大学神学科での講師を務めた時代である。後者は、もっぱら、崇貞学園が経済的な危機に陥ったことが原因で、清水は何とか学園の運営資金をねん出するために、日本で募金活動、或いは、崇貞学園の女子学生が作った刺繍の日本の販売、また、同志社で講師をしたのであった。しかし、この資金活動が、清水にとって「厄」となった。

当時、42歳となっていた清水安三はある時、急に、当時、同志社総長であった大工原銀太郎先生（1929年〜1935年まで総長）から総長室に呼び出される。そこで、「君は商売人であって教育家に適していない」と言われ、同志社を辞めるように言われたのである。その理由は、1931年の夏、清水安三が長野

県の野尻湖の湖畔で例によって、中国の崇貞学園の女子学生が作った製品をずらりと並べて売っていたところ、目の前に偶然、当地にいられた大工原総長が立っており、その現場を見られたからだと、清水は言っている。清水は大工原総長からの辞職勧告に対して、その場で即刻辞表を提出して同志社を去るのであった。その際の事を次のように清水は思い出している。

「総長室を出た私は、同志社の鉄門を出て今出川御門から御苑内に入った。私はその門を叩き、同志社が私を育て上げたことを名譽とする時が来るであろう。それまでは決してこの門を再びくぐるまいと、心の中く誓ったのであつ



美穂夫人

安三

郁子夫人

た。」

5. 戦後 桜美林学園の創立

その後、清水は崇貞学園の運営資金の目途もたち、中国へ再び帰っていく。しかし、その間、妻・美穂は1933年に亡くなり、また、日本は戦争への道を加速し、中国での状況は悪化していく。清水はその中でも、戦争を阻止するためにいくつかの大きな働きをし、また、崇貞学園の創立者として「北京の聖者」と呼ばれるほど、知名度が上がっていったのであった。1936年には教育家で、男女共学論者として日本ですでに有名であった小泉郁子と再婚し、崇貞学園は更に質も量も増していったのであった。



崇貞学園時代

しかし、1945年日本の敗戦により、中国政府は崇貞学園を接収し、清水夫妻の私有財産も没収されてしまい、清水は郁子と共に翌年1946年に日本にほぼ無一文で帰国したのであった。

ところが、清水安三にまたしても奇跡が起こる。職を得るために上京していた清水は東京神田の路上で偶然、賀川豊彦に邂逅するのであった。賀川豊彦は戦前からすでに日本を越えて世界に名前が知れ渡っていた牧師・社会運動家であり、進駐していたアメリカ軍とも太いパイプを持っていた。その賀川に清水は路上で偶然出会い、それまでの中国での働きを話す。そして、清水はこれから「農村に入り」「農村に学校と教会を建てたい」と賀川に話した。すると、賀川は「よろう。僕のオフィスまで来給え」と誘い、そこで、賀川がその当時まかされていた軍用地を指して、「僕は君に大きい建物を紹介する。それは学校にあつらえ向きの建物だ。行ってみたまえ」と言っており、土地と建物が、現在の桜美林学園のスタートとなるのであった。当時、JR横浜線の淵野辺駅の北側にあった一面の桑畑に囲まれた地に、旧日本軍の造兵廠があつた。それを清水は譲り受けたのであつた。



終戦直後の学園予定地の前で

た。それは敗戦後1年の1946年の事である。ここから桜美林学園は出発し、現在では、幼稚園、中学校、高校、そして大学へと発展し、園児、生徒、学生の総数は11000人ほどとなっている。

結 清水安三の夢としての新島襄

新島襄

清水安三は行動の人である、と誰もが認める。しかし、その清水の行動を生み出したのは「夢」であつた。夢を持つことを、清水は最初にヴォーリスに学んだのであった。しかし、その夢の具体的な内容を清水は新島襄に学んだと言える。新島から学んだ清水の夢は、ひとことで言えば教育・学校であつた。それは、清水が桜美林学園創立後も、学園に問題が起こり自分で解決できない時、しばしば京都にまで帰り、若王子の新島の墓の前で祈つたということから伺える。さらに、その夢は、現在桜美林学園の創立の理念として「キリスト教主義に基づいた国際人の育成」と宣べられていることから分かる。この理念を清水は、国禁を犯してアメリカに渡つた新島襄の国際感覚とキリスト教信仰に深く学びとつていたはずである。

田舎の「石ころ」に過ぎなかつた清水は、新島襄・同志社を通して、彼自身がキリスト教主義に基づく真の国際人にまで育てられていったのであつた。それは、彼自身の言葉によれば「国家問題に超越せしは耶蘇」である、という新島から学

んだ確信に支えられていたのであつた。

参考文献

- ・清水安三 著『石ころの生涯』
- ・小林 茂 著『東支那海を越えて―清水安三先生の前半生―(2011年)』
- ・太田哲男 著『清水安三と中国』(花伝社、2011年)

8

太田哲男 著『清水安三と中国』(花伝社、2011年) p. 57..清水安三自身の自伝における記憶(徳富蘇峰の『支那漫遊記』(1918)の言葉(「思うに、我邦の宗教家にして、果たして一生の歳月を支那伝道のため

- 注
- 1 『石ころの生涯』P. 336
- 2 同右 P. 307
- 3 清水自身の言葉によれば、膳所中学では54人中53番目、また、後に同志社を卒業する時も8人中7番目だったという。
- 4 清水は自分の生涯において最も偉大な影響を与えた人物としてヴォーリスの名をあげている。その際清水のヴォーリスに対する印象は「ボリツさんは夢見る人である。」或いは「彼は偉大なる空想家である」という事であつた。清水安三『石ころの生涯』P. 23

予は、英米その他の宣教師に随喜者にはあらざるとも、彼等の中にかくのごとき献身的努力あるの事実は、たとえ暁天の星の如く少なきも、なお暁天の星としてその光を認めざるを得ざるなり」(p. 58) に直接触発された)は間違いであることは指摘されている。いずれにせよ、清水の中国伝道への決意は徳富蘇峰の影響が一つにある事は確かである。「校門を出てここに7年、この間あたかもこの(蘇峰の)一文を反証せんがために生けるがごとくに、支那に伝道して今日に至つた」(清水安三『支那当代新人物』(1924年))と清水は後に述懐している。

- 5 清水安三『自伝 復活の丘 第16号、1957年2月1日
- 6 清水安三『石ころの生涯』P. 30 同右P. 30~31
- 7

- 9 清水安三『石ころの生涯』P. 44
- 10 大工原総長の清水への辞職勧告は他にも理由があつたと言われている。清水安三『石ころの生涯』P. 81

金森通倫についての試論

きたがき むねはる
北垣 宗治 (同志社大学名誉教授)

『同志社時報』の読者の中には、NHKの大河ドラマ「八重の桜」が終わって、一抹の寂しさを感じている人は少なくないであろう。明治9年、すなわち同志社英学校が開校した翌年に、九州は熊本から、熊本洋学校でアメリカ人教師ジェインズの薫陶を受けた若者たちが三々五々、同志社英学校に入学してきた。その数は三十数名にのぼる。彼らは同志社の宣教師たちから「熊本バンド」と呼ばれた。彼らはそれぞれに個性的な若者で、独立不羈の見本のような連中だった。彼らは学問の面で互いに競争しただけでなく、先生である新島やデヴィスを質問攻めにして困らせた。宣教師ラーネッドは熊本バンドを同志社の源流の一つと位置付けているが、私は今でも熊本バンドは、同志社の活力の源であると考ええる。本稿はその中の一人である、金森通倫（みちとも）についての試論である。

「八重の桜」では熊本バンドのうち、伊勢時雄と徳富猪一郎が脚光を浴びたといえよう。伊勢は、山本覚馬の娘みねと結婚する。徳富は新島襄と八重にとつて特別に重要な存在だった。このほか小崎

弘道が徳富とともに、神奈川県大磯の百足屋の一室で、新島の死の床にはべっていた。ドラマの中で金森通倫（演じた俳優は柄本時生）には特別な役割は与えられていなかった。その金森を私が改めて取上げる理由は、彼の信仰の変化が特別に興味を引くからである。金森はローマ字でサインするときには Paul M. Kanamori と書いた。彼がパウロというクリスチャン・ネームを名乗るのは、熊本洋学校時代にジェインズから使徒パウロの話を聞いて感激し、私はパウロのような生き方をします、とその場で宣言したからだだったという。

金森はたしかに宣教師として日本の各地、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスに伝道してまわった。しかし人間としての金森はきわめてペテロ的な人物だったと私は思う。彼は衝動的に行動する傾向があった。金森をよく知る友人で、新島襄の死後、第2代目の同志社社長を務めた小崎弘道は、このように金森を評した。「金森の如く極端に馳せたものはなかった。金森は何時

へば飽く迄信仰を高調し、自由と云へば飽く迄自由を遂行した。キリストの神聖、奇蹟は勿論、終には神の存在をも靈魂の不滅をも否定せねば止まない如き勢であった。」（小崎弘道編著『日本組合基督教史（未定稿）』1924）

金森通倫（1856—1945）は肥後国（熊本県）玉名郡小天（おあま）村の村長の役宅に生まれた。祖父は郷土で総庄屋だった。肥後国の水俣に生まれた徳富猪一郎の家も同じく一領一匹の郷土で、総庄屋であった。金森家と徳富家は似通った境遇であるが、金森が士族の意識を持つのに対し、徳富はむしろ士族に対する反感を抱きつつ育ったようである。金森には五歳年上の兄がいた。父が比較的早く死んだので、この兄が金森家を継いだ。金森の回顧録にこの兄は殆ど登場しない。金森が熊本洋学校で耶蘇になったと聞いた兄は、通倫を何とか引き戻そうとしたあげく、信念を曲げない彼を迫害した。しかし金森は屈しなかった。戸主である兄は、弟を金森家から追放した。金森は1872年、15歳のときに熊本洋学校に第2期生として入学した。熊本

金森は9人目に署名している。

洋学校はL. L. ジェインズというアメリカの陸軍砲兵大尉が英語ですべての科目を教えていた。ジェインズは通訳を置かず、ダイレクト・メソッドで英語を教えた。ジェインズは徹底した開発主義と競争主義を実践したので、洋学校の秀才たちはしのぎを削って勉学に励んだ。学期末には科目ごとに試験の成績が地元の新聞に掲載された。上位4人はいつもきまって、宮川経輝、海老名喜三郎、市原盛宏、金森通倫が占めたという。

生徒が英語に習熟した頃ジェインズは、土曜日に聖書を読むようにと誘った。何人かの生徒が英語の聖書に強く惹きつけられた。当時はまだ聖書の邦訳はなかった。それはすっかり別の世界だった。ジェインズを通してアメリカにかぶれていた金森は、宗教もまたアメリカのものでなくてはならなかった。そしてキリスト教こそが文明の基礎であると確信した。ジェインズの影響を受けてキリスト教を奉じるようになった生徒たちは、1876年1月30日に花岡山に登り、「奉教趣意書」に署名した。35人が署名しており、

熊本バンドの決意を表明した、有名な「奉教趣意書」の現物は同志社に保存されている。しかし金森は晩年に書いた回顧録の中でこの趣意書に対して厳しく批判的な態度を取っていることが注目を引く。金森の言葉引用する。「奉教主意書「ママ」を読んだら誰でも奇異の感を起すだろう。是が三十五名の青年共が基督教を信ずる主意書だろうか。此の主意書中には神、基督、救、贖罪、罪、悔改、天国、地獄、靈魂、未来など云う言は一つも見えない。その代りに皇国とか報国の志とか、人民の蒙昧を開くとか云うやうな政治的の文字が現はれて居る。唯一ツ宗教じみた言は『上帝の譴罰を蒙る』云々。是は併し基督教より来たと言うより寧ろ儒教より来たと言ふべきだ。所謂天罰だ。基督教の本筋の魂の救から入ったものがこんな主意書を見たら、是はクリスチャンではないと云うだろう。又実にそうである。全く本筋から横道に外れて居る。名称からが基督教と云はず西教と云つて居る。若し本筋の信仰で書くのなら『我々近頃基督教を学び、深く己

の罪を悔い、十字架の救の廣大無辺なるを悟り、是によりて未来に於ける永遠の幸福を祈（よろこ）ぶ。然れ共同朋未だ此の救を知らず。この魂將に永遠に滅びんとす。吾輩是を見るに忍びず。挺身以て之を救はんと欲す」云々とでも書くべきだろう。（『金森通倫回顧録』『私家版』、43―44頁）

この回顧録は金森が喜寿を迎え、公的な生活から引退した後に書いたものであるから、彼の信仰は筋金入りの福音主義である。彼はそれを「本筋」のキリスト教だと確信していた。その立場からすると、「奉教趣意書」はまるで話にならない文書なのである。金森の批判はそのまま、金森の自由主義キリスト教への批判であり、同時に痛烈な自己批判でもある。

同志社英学校は1879年に15人の第1回卒業生を出した。15人とも熊本バンドである。卒業生はそれぞれ日本語が英語で短い演説をした。金森の演説は「耶穌ハ社会ノ精神」という題で、いかにも金森らしい主題である。卒業後ただちに、新島校長やデイヴィス教師の大きな期待を担って伝道の地に赴き、めざまし

校長だった。彼は教師として教室で教えながら、夜間には寮内をまわって室内の点検までしている。彼に対する新島の信頼はきわめて篤かった。

新島は1890年1月に療養先の大磯で亡くなる。亡くなる2日前に八重夫人と小崎と徳富が立会い、2時間に亘る遺言を徳富が筆記した。その中に金森についての項目があった。

金森通倫「氏」を以て余の後任と「なす差支ナシ、氏は事務ニ幹練し才鋒当ル可ラサルノ勢アリ然れとも其の教育家として人を順育し之を誘掖するの徳ニ欠け或は小刀細工ニ陥ルの弊ナシトセス 是れ余の窃かに遺憾とする所ナリ（『新島襄全集』第4巻403頁）

その内容を金森が何時、誰から聞いて知ったのかは謎である。新島の後継者はほぼ一致して金森が就任するものと考えられていた。しかし金森は動かなかった。彼は新島の葬儀で説教すべき立場にいたが、それを拒否した。葬儀で何の役割も果たさず、末席に座っていた。新島の

い働きを開始した3人がいた。新島襄の父祖の地である、上州安中へ行った海老名喜三郎、四国の今治に行った伊勢時雄、岡山に行った金森通倫である。この3人よりも少し遅れて伝道に入ったのは東京の小崎弘道と大阪の宮川経輝である。これら5人が日本における組合教会をスタートさせたといえる。伝道戦線から最初に身を引いたのは金森と伊勢（やがて横井という旧姓に復帰する）だった。小崎と海老名（喜三郎から弾正という古風な名前に改名する）と宮川は最後まで伝道戦線にふみ留まった。この3人は世にいう「日本組合教会の三元老」である。

話を急ぎ過ぎたので、戻さなくてはならない。金森は1886年に新島から強く要請されて同志社に戻り、1890年までの4年間、同志社の神学の教師だった。しかし岡山教会を離れることは大変であつたらしい。彼は非常なエネルギーを以て神学の研究に没頭した。当時教室で金森からロマ書の講義を受けた高橋卯三郎の証言がある。「氏の研究法はただダラダラと自分が講義さるるにあらす。一節を説けば、必ず諸生をして十分、そ

遺言が金森に対するとどめの一撃となつたのだろうか。本井康博氏は、新島の晩年を悩ませた教会合同問題が遠因だったかもしれない、という見解を出された。

（『同志社山脈』41頁）金森自身は自伝の中でこう書いている。「先生の遺言に私を後継云々とするのは、先生としては義理にも、さう云はねばならぬと云ふ心持からであらう。無論又先生から私が命ぜられても受けぬことは前にも申し了約束で承知して居られるので、如何にも煮え切らぬことを云って居られるのであるう。」（『金森通倫回顧録』96頁）

金森の言葉は負け惜しみであろうか？「教育家として…徳に欠け」は確かに厳しい批判であるが、金森はこの批判には一言も答えていない。むしろ、自分のそれからの人生を見て下さい、というのが彼の本音だったのかもしれない。金森は新島を一切批判しなかった（のちに小崎が教会合同問題で、新島を手厳しく批判しているのと対照的である）。要するに金森はすぐに辞表を出して同志社を去り、それまで小崎が牧師をしていた番町教会の牧師を引受けた。彼は同志社との縁を

れに対する意見、質問を提出せしめ、何処までも疑惑を解かざれば止まざるの方便を取られたり。…而して氏が明晰痛快なる頭脳より縦横に弁証さるる信仰論は一々予等の懷疑を開かざるはなく、神学上、諸種の問題を含める一篇の羅馬書は金森氏の見事なる答弁によりて、所謂快刀乱麻を断つ如く、予輩の前に解せられざる処なかりき」（『熊本バンド研究』、325頁）。高橋は金森の説教をも同様に礼賛している。

当時新島は同志社を大学にする運動で、東奔西走の毎日だった。金森は新島を助けることを自分の義務であると考え、ただちに書齋の人から行動の人になった。新島を助けて大学設立運動にも力を尽くしたりしている。1888年には「社長代理」に任命され、同志社を動かす立場に立った。彼は同志社教会の牧師でもあつた。すべてが金森を中心に動いている感があり、いわれない誹謗中傷を受けるに至つた。新島はそのことを気の毒に思い、「社長代理」から解放したが、新しい役目は神学校、普通学校、予備校の

すっかり切つたのである。彼は宗教家の偽善を口を極めて批判しているが、その宗教家は彼の多くの友人ばかりか、彼自身をも含むことになりかねない。人間としての金森に神秘的深淵を感じるの、特に新島の死後、金森が同志社をあつさりで見棄てたことである。

金森は約20年間にわたって実業界で働いた末、愛する妻、小寿の死に会い、これが契機となつて福音信仰に復帰し、やがて独立伝道者として驚異的な伝道活動をするようになる。金森は自分が牧する教会を持たなかつた。日本人6千万人の魂の救いが目標だった。千人を取容でできる大会堂を使い、あるいは劇場を借りて1回につき3時間の説教をした。拡声器のない時代だったから、大声を張り上げたの演説的な説教だった。彼はいつも「神」「罪」「救い」という順序で（それは彼の岡山時代の著作『キリスト教三綱領』が基になっている）、それぞれの項目について1時間ずつ割当て、3時間の説教をしたのである。同じ説教を毎晩繰り返したが、毎晩のように、会場は大入り満員だったという。アメリカにおいて

も、熊本洋学校と同志社英学校で鍛えた英語を駆使し、日本語の場合と同じ伝道スタイルを継続した。アメリカのクリスチャンたちは彼のことを「日本のムーデー」と呼んだ。

ムーデー (Dwight Lyman Moody, 1837-1909) について一言する。彼は新島との接点がある。彼はマサチューセッツ州ノースフィールド出身の大衆伝道者で、サンキー (T. D. Sankey) という歌手と組んで広く伝道してまわり、新島も彼を尊敬していた。第二次のアメリカ滞在中に新島は同志社の卒業生で熊本バンドの一人である蔵原惟郭(くらはら)：これひろ) から頼まれて、アメリカの学校に蔵原を入れようと努力した。その一つがノースフィールドの、ムーデーの学校 (Mount Hermon Boys' School) だった。蔵原がその学校に入学していないことからすると、交渉は不調に終わったのかもしれない。1885年10月、ムーデーはボストンのトレモント会堂を満員にして伝道集会を開いていた。ハーディー家は滞在していた新島は、ハーディー家からはボストン・コモンを横切るだ

けのところにあるトレモント会堂に出掛けた。新島を見つけたムーデーは聴衆に向って、新島さんのために祈りまじょう、と呼び掛けた。すると新島は、「私のためだけでなく、日本人3千700万人のためにも祈ってください」と答えたという。このエピソードはどういうわけか、新島全集第8巻の詳年譜に記録されていない。日本で金森が「日本のムーデー」と呼ばれるのを私は聞いたことがない。それは恐らく私たちがムーデーのことを知らないためであろう。新島は雑記帳の中に、ムーデーにおける愛の8通りの解釈を書きとめている。(『新島襄全集』第7巻287頁)

同志社は開学以来沢山の牧師を輩出してきたが、金森のような特定の教会に属さないで大挙伝道した人は外にないのではなからうか。小崎弘道は靈南坂教会、宮川経輝は大阪教会、海老名弾正は(弓町)本郷教会をそれぞれ根拠地とした。3人はそれぞれに特色のある、偉大な牧師であった。しかし金森は彼らのような、自分の教会を持たず、ひたすらすべての人の魂の救済を願った。

私は最近、自分の所属する日本英文学会で、「金森の英文の手紙と自伝」という主題で発表した。発表後、私よりも1歳年長のT教授が質問した。「金森についてのご発表を興味深くうかがいましたが、伝道者として彼が活躍していた時代は、日本が日増しに右傾化、軍国主義化して行った時代でした。金森はそのことに対してどのように発言したのですか？」まことに厳しい、そして重要な質問である。残念ながら、金森はほとんど発言していない。福音主義者は無限に、個人の魂の救いのために、聖書に基くメッセージを投げつける。しかし旧約の預言者たちが果たしたような、集団の罪、国家の犯罪に対するメッセージはないに等しい。キリスト者は「見張り」の役割をも果たさねばならない。この意味で金森は半面教師であるというのが私の結論である。